

CONTENTS

一日中玩具で責められた後に自分からおちんちんをねだる話

含まれる要素

乳首責め、玩具責め
(ローター、電マ、ニップルドーム、
ディルド)、痒み責め、筆責め、
快楽責め、言葉責め、前立腺責め、
連続絶頂、強制自慰、羞恥プレイ、
連続絶頂、♡喘ぎ、濁点喘ぎ
※乳首責め、痒み責め多めです。

人物紹介

白風瀬那（しらなぎ せな）十九歳。大学一年生（深瀬との再会時十七歳）

顔がとにかく良い。背も高いためどこにいても目立つ。家庭環境に問題を抱えている。自分の名前が好きじゃない。母が女の子を望んでいたこともあり、幼い頃は女の子のような服を着せられていた。その頃に深瀬と遊んだことがあり、その思い出を大切にしている。高校生の時に偶然深瀬と再会したことで、一生続く関係を築きたいと強く思い、警戒心を念入りに解いてから手を出した。

深瀬稀上（ふかせ きあ）二十歳。大学二年生（白風との再会時十八歳）

至って普通の学生。白風の顔が好き。流されやすい。白風に初めて犯された日から今日に至るまで、「俺達って恋人同士なのか？」と聞けずにいる。家庭環境に問題を抱えている。自分の名前にコンプレックスを感じているため、「稀^き上^あくん」と呼んでくるのはやめてほしいと思っている。幼い頃に白風と遊んだことがあるが、そのことを忘れている（※当時の白風が女の子の格好をしていたため）。

一日中玩具で責められた後に自分からおちんち んをねだる話

「ちんこ挿れられるの嫌だ……ッ」

「なんで？ 僕のおちんちんより大きいの、啜えたことあるじゃん。今更何？」

「玩具の方がいい！」

「……え？」

「こんなのやっぱおかしい……！ 俺達、友達、
なのに……!!」

……この会話が、酔い潰れた^{ふかき}深瀬^あ稀上が覚えていることの、すべてだ。



「……」

肌に触れる空気の冷たさに、意識が覚醒する。

服が剥ぎ取られている。そう理解してすぐ、両手首が頭の上へ引き上げられていることに気づいた。ひとまとめにされた手首から伸びた縄が、ベ

ッドのヘッドボードに何重にも巻き付けられ、固く結ばれている。窓の外は真っ暗で、まだ夜は明けていないようだ。

ぐ、と縄を引いてみる。びくともしない。手首には薄いタオルが巻かれていて、その上から縛られているから、擦れても痛みはないが、その用意周到さが逆に怖い。

「やっと起きたね」

「……^{しらなぎ}白凧」

見下ろしてくる白凧の顔は、いつもどおり綺麗だった。部屋が薄暗いせいか、眼鏡のレンズが光を弾く。ただそれだけなのに、背筋に冷たい汗が吹き出した。

高校の時、古本屋で白凧に話しかけられたことがきっかけで、仲良くなった。一つ歳が下で、違う高校に通っていたけれど、すぐに距離は縮まった。

家に居場所がない。

親から無償の愛を受け取ったことがない。

自分の名前にコンプレックスを感じている。

誰かを愛したかったし、愛されたかった。

二人は、似ていた。

仲良くなる理由なんてそれで十分だった。いや、十分すぎた。だから、あふれた。色んな気持ちがこぼれて、相手に受け止めてほしくなったのだ。

「ピンク色の乳首も、小さいおちんちんも丸見え。はは、今の^{きあ}稀上くん、無様で可愛いよ」

「……友達に無様とかよく言えるな」

「僕達が気の置けない友人同士だっていう証だよ」

白風は卑猥な玩具が入っている箱を持って、笑いながら近づいてきた。スタンドに立てられているスマホのカメラがこちらを向いている。撮影されている、とわかって、心臓がどくどくと嫌な音を立てる。

「……えーと、君って結局なにがしたかったんだっけ……」

「……え？」

「ああそうだ、僕といちゃラブセックスするより、オナニーがしたいんだったね」

「……………」

深瀬は記憶をたどる。そんな言い方はしてない、はずだ。飲み会の後で記憶が曖昧だけど、言った言葉は覚えている。

挿れられるのもう嫌だ、玩具の方がいい。オナ

ニーがしたいなんて、言っていない……はずだ。

「……そうだよな？　僕が後で動画見返したときに抜けるように頑張ってくれるとも言ってた」

「は……？」

白風は深瀬のそばで膝をつくと、中から取り出した、一番小さいディルドにローションをかけはじめた。

「……まで、しらなぎ、」

深瀬の制止も聞かず、白風は深瀬の足を開かせた。ディルドが中を穿つ。ずぶぶ、と異物が入り込んでくる感覚は、いつまでたっても慣れない。

「ううっ、……」

けれど前立腺を圧迫されて、異物感はすぐに消えた。直接触れられてもいない性器から先走りがとぷとぷと溢れる。茹だった脳に靄がかかっている。

「わあ、すんなり入った……すごいね」

「ッああッ……ッふ、……」

「もどかしい？　まあ、この大きさだと奥に届かないもんね。淫乱な稀^き上^あくんはもっと奥までゴリゴリされないと満足できないのはわかってるけど、生憎いつものやつは電池が切れちゃったんだ」

「ん、……ッ！♡♡」

じくじくと奥が疼いて、たまらず腰を揺らしている、白風は箱から筆と軟膏と、そしてニップルドームを取り出してきた。

「君の乳首を開発したときに使ったやつ。懐かしいね」

「へ……？」

白風が軟膏の入った瓶の蓋を開ける。ニップルドームに付属しているアタッチメントは刺激が強いから、摩擦を軽減するものを塗らないとだめなんだ、と言われて塗られたのがそれだ。塗られてすぐにじくじくと痒みが襲ってきて、そのまま数時間放置された後にニップルドームをつけられた。失禁するまでいじめ抜かれ、みっともない姿を全部撮影された。あんまり思い出したくない記憶だ。

「白風、それ、やだ……！」

「そんなんじゃいつまで経ってもオナニー終わらないからね。僕は嬉しいけど、君は嫌でしょ？」

「……や……やめ……」

白風は軟膏をたっぷり含んだ筆をそのまま右の乳首に押しつけてきた。塗るというより、置いていくような手つきだった。乳首を勃起させるよう

に、筆を叩いていく。そうしてまた瓶の中に筆を沈める。持ち上げた毛先から軟膏がしたたった。それを左の乳首の先へ落として、筆を細かく振っていく。ぷくりと芯を持った乳首が、じくじくと熱を持ち始める。

「搔けないね」

わざわざ確認するように、白尻が縄を軽く引いた。搔けない。当たり前のことを言われただけなのに、それを言葉にされた途端、痒みが襲ってくる。

「ふ……う……あ……」

蚊に刺されたあのような痒みに、深瀬は悶える。我慢していればやり過ごせると思っていたけど、甘かった。痒いのは我慢できない。じくじくと疼いて、堪らない。身をよじると腰がずれて、中のものが角度を変えた。ぐ、と前立腺を押し上げられて、深瀬は目を見開く。逃げ道が、どこにもない。

「ひ、……く……♡」

「後で見返した時、ここで一回抜いちゃうかも。痒いの我慢してる稀^き上^あくん本当に可愛い……」

「ふ、……あ………は……」

「君の乳首をちゅぱちゅぱできないの嫌だし、全然使わなくなったけど……そういう意味では、こういう状況になってよかったのかな？」

白凧は深瀬の答えを待たなかった。筆と瓶を床に置いて、ベッドの縁に浅く座ったまま、こちらを見ている。

「う……………」

軟膏を塗られた場所が、どんどん自己主張しはじめる。搔けるはずがないのに、腕を下ろそうと動いてしまって、そのたび縄が鳴った。

その一部始終を、白凧とスマホが、黙って拾っている。痒みに藻掻く顔も、揺れる腰も、その間に沈んでいるものも。かあっと顔が熱くなって、息が浅くなる。

「……っ、う……あ……♡」

自分の声だけが部屋に落ちる。

どれくらい時間が経ったのか分からない。五分かもしれないし、それ以上かもしれない。だけど白凧が動く気配がない。もしもこのまま何時間も放置されたら、耐えられない。

「……白凧、」

すがるように呼ぶと、ベッドが軋んだ。

「……うん、そろそろいいかな」

白風はまた筆を持ち、毛先を瓶に突っ込んだ。大量の軟膏がつけられた状態で、乳首に戻ってくる。

「え、あ……なんで、」

「乳首の周りにもしっかり塗り込んであげるね」

「え、あ、やだ、やだ……もっと痒くなるのやだ!!」

「だめだよ、ニップルドームつけるの久々だし……痛い思いしたくないでしょ？」

「ローション、ローションある……!!」

「今乳首にローションかけたら痒いところ広がっちゃうよ。ちょっと考えたらわかるでしょ？」

白風はそう言って右の乳輪をくるくると筆でなぞった。左の乳輪もたっぷり軟膏をつけてから、輪郭を確かめるみたいに、乳首の周りに塗りつけてくる。かゆい、気持ちいい、かゆい、気持ちいい……♡♡♡♡

「う…あ……」

白風は宣言通り乳首の周りだけをくるくるとなでてくる。お預けされている乳首はぷっくりと芯を持ちはじめ、早くカリカリこすこすしてほしくてふるふる震えている。それをわかっているくせ

に、白鳳の握る筆先は乳輪をさすさす掠めてくるだけだ。

「……そうだ」

「……っ、ん……？」

「いーち」

筆先が、右の乳輪を一周し、その後に左も一周する。

「……に」

「なんで、数えて、」

「どっちも平等に塗らないとなぁと思って。……はい、さーん」

「……！」

またくると両方の乳輪をくすぐられる。数字が一つ増えるたび、意識が勝手に筆先に向いてしまう。

「五十までいこうか」

「ご、じゅ……っ？」

残り四十七。

数えるつもりなんてなかったのに、頭が勝手に引き算をした。終わりまでの距離が数字で見えてしまって、それがどれだけ遠いか分かってしまう。

「しー」

「っ、……ッ……」

「ご。……ろく。はは、おちんちんびくびくしてるね」

言われてはじめて、自分の性器が震えていることに気づく。意識してしまうともうだめだった。

「なーな。は一ち、きゅーう、じゅーう……じゅーいち、じゅうに……」

ぽたぽたと汗がしたたり落ちる。白風の声聞いていたら、耐えられなくなる。深瀬はぐ、と歯を食いしばって、時間が過ぎるのを待った。

「……^き^あ稀上くん、今何回でしょう？」

ふと、筆の動きが止まった。

「え……？」

「あれ、聞いてなかった？ 正解はね、まだ十回だよ」

「は……!? そんなわけ、ない!!」

「はい、じゅういーち、」

「ッあ、ん、……まって……」

「じゅうに、じゅうさん……」

「ひ、……う……♡♡」

しっかり白風の声聞いて、終わるのを待つ。

「——じゅうよん。……ちゃんと乳輪の際々まで

塗らないとね」

毛先が、乳輪の外へ滑り出た。

「ま、って、そこまで、塗らなくて、いい……っ」

「だめだよ。境目も擦れていたくなるんだから」

言いながら、白風は円を描いていく。汗となじんだ軟膏が乳輪をはみ出て、痒い場所が広がっていく。芯を持った乳首が取り残されているかのように、空気に晒されたまま震えている。

「——にじゅうさん。……はは、大丈夫？」

「う……う……あああ、♡♡」

筆が離れる。離れている数秒のあいだに、塗られたばかりの場所が一斉に痒みはじめた。

「にじゅうよん……にじゅうご。折り返しだね」

残り半分。深瀬は歯を食いしばって耐えた。乳輪は熱を持って腫れぼったくなっている。

「——はい、ごじゅう。おしまい」

その声に、深瀬は汗の伝う顎を上げて、ほっと息を吐こうとした。

「じゃあ次は乳首にもう一回塗るね」

「……っ、え……？」

放置されていた乳首の先っぽを、つんと湿らせた筆先でくすぐられて、深瀬は目を見開く。

「いーち」

「あああ、あ……っ!!♡♡♡」

溜まっていたものが一息に噴き上がって、視界が白く飛ぶ。

「わ、すごい声。ほんと乳首だいすきだね」

「ちが、ちがう、ちがっ……!!♡♡」

「にー」

「もうやだ!! それ、乳首ごしごしするやつつけで!! もういいからあ!!」

「さーん」

「んあ、は、ア♡♡かゆい、やだ、しらなぎ、……!!かゆい!!♡がまんできない!!!」

ジタバタと身体を揺らすと、ディルドに前立腺を擦られる。そうしてふと、窮屈そうにズボンを押し上げているそれが視界に入り、勝手に腰がびくんと震えた。バキバキに勃起した性器で中を犯される感覚をじわじわと呼び起こされて、声がこぼれ出る。顔が熱くなって、必死に白風から顔を逸らす。

「こらこら、僕を見ててよ」

「ふ……♡う……」

「君のえっちな顔見たい」

今更なのに、白風を見るのが恥ずかしくなって、
深瀬はぎゅっと目をつむった。

「……ねえ、おちんちんにも塗られたい？」

「……っ、！」

その言葉に慌てて白風に視線を向ける。すると
白風はまた瓶に筆を沈めて、乳首に近づけてきた。

「大好きな乳首こしこししてあげるから、頑張っ
てね」

「あ……あ……」

芯を持った乳首に筆の先端が触れた。ようやく
訪れた刺激に、中がずくんと疼く。けれど求めて
いるものは与えられない。白風はさすさすと乳首
の先をくすぐって、痒みを引き出してくる。

「ぐぐ……っぐう……」

「大好きな乳首なら百回くらい頑張れそう？」

「っ、!! しらなぎッ……!! やめて……ッ!!
いじわるしないで、しらなぎ……！」

「大げさだね、^{きあ}稀上くんは。ま、いいよ。君算数
苦手だもんね。数えるのはやめるね」

「そういうこと、じゃ、なくて……!! ほんとに、
だめなんだって……!! やだ、……かゆい、かゆ
いのやだ……!!」

胸の先端に、筆がつんつんと小刻みに押し当てられる。ぬめった毛先がその先端をこすこす♡となぞったり、さすさす♡とくすぐったりを繰り返す。時折、筆全体を平らにして乳首を押し潰され、目の前でチカチカと星が飛ぶ。

「ふふ、乳首、大きくなって可愛いね。美味しそう」

「っう……♡♡♡しらなぎっ、……やだ……！
♡♡♡」

「こらえ性ないなあ。もうちょっと後輩にいいところ見せてくださいよ、稀^き上^あ先輩」

「敬語、やめて、」

「要求が多いね。僕はこんなにもいじらしいのに」

「んんっ♡♡♡♡」

敏感な乳頭に毛先を埋め込むようにくにゅくにゅと筆を動かされ、背中が弓なりに撓った。痒くて、苦しくて、気持ちよくて、涙があふれてくる。痒いだけで泣くなんて、と思うのに止まらない。視界が滲んで、白風の輪郭がぼやける。ぼやけても、笑っているのは分かった。

「うう、っふ、……く……」

「はは、泣いちゃった。ごめんね？ 乳首もっと

いじめられたいね。服の上からカリカリされたり、ちゅぱちゅばなめられるのすきだもんね？」

「あ、あ、……っふ……」

「でも残念だ。僕だって君に触りたいのに、玩具の方がだーいすきみたいだから」

こちらを食い入るように見つめる白風の指先に力がこもって、乳首を潰された。

「う、やァっ、ぐん……!! ♡♡♡あ、あ、ん♡うっ♡♡♡」

強い刺激に、びりびりとした痺れが身体中を一気に駆け巡る。胸を大きく突き出す格好になったとき、白風はニップルドームを深瀬の両乳首につけてきた。

「っあ……!♡」

白風が付属のスイッチをいれると、きゅう、と乳首を吸われる。中のアタッチメントに先端が触れてすぐ、それが乳首を刺激するために動きはじめる。

「っあ!?♡♡♡ いッ……! あ……あああ…っ、…!!♡♡♡♡」

「お望み通りつけてあげたよ? ありがとうございます?」

「あ、っ、ありが、……と、ございます——ッ!!
♡」

右の乳首はブラシでこすこすされ、左は舌のかたちをしたシリコンの束でこしこしされる。質の違う快感が同時に襲ってくる。頭がおかしくなりそうだ。

「あ、あ♡♡♡あぁあ!!♡♡♡」

「こしこしされるのきもちいいね。ほら、見て。
乳首おいしそうに飲み込んでる」

透明な壁の向こうで、左の乳首がアタッチメントに埋まっているのが見えた。押し潰されて、花が開くように広がったかと思うと、また乳首を閉じ込める。

「——ッ♡♡♡ ……っ♡♡♡」

「ねえ、どっちの方が気持ちいい？」

左右で違う責め方をされて、深瀬の頭は完全に混乱していた。どちらに意識を寄せても、もう片方が別のやり方で快感を押し上げていく。

「どっちもやだ♡♡♡あ、あ、あ♡♡♡ むり、これむり、あたまおかしくなる……っ♡♡♡」

「そっか、選べないんだね」

声が止まらない。下腹がぐずぐずに溶けていく。

性器からこぼれた先走りが、腹やシーツに滴って垂れていく。

「おちんちん、ドロドロだね」

「言う、なあ♡♡♡」

「かゆいところ搔いてもらってるだけでこんなにおちんちんがご機嫌になるの、稀^き上^あくんくらいかもね」

「ちが……っ」

「違わないでしょ」

「ちがう!!♡♡♡はずして♡♡きつい♡♡♡」

透明なドームの中で、真っ赤に膨れたものが、毛の中に埋まっては掃かれ、舌に巻き込まれては吐き出されている。中に溜まった軟膏が白く濁って、そのぬめりごと搔き回されていた。

「あッ♡♡♡♡うう♡♡♡」

いちばん堪えたのは、痒みが少しも減らないことだった。散々こすられているのに、痒みの上から別の刺激が通り過ぎていくだけで、全然マシにならない。

「かゆい、っ、かゆいのとれない……っ♡♡♡ こすってるのに、とれない……っ♡♡♡」

「そうなの？ かわいそう。じゃあ、別のやつつ

けてみる？」

ニップルドームが外される。膨れきった両乳首が、外気に触れただけでびりびりと痺れ、それが痒みを誘発した。

「わあ、まっかっか……」

白尻はまた瓶の蓋を開け、筆に軟膏を含ませて、腫れきった乳首の上に置いてくる。

「なんで…っ!!　なんで……!♡　やだ!!」

「何度も説明してるでしょ?　痛くなったら辛い
の君だよ?」

深瀬は喉を反らせる。毛先が丁寧に、乳首の先端から乳輪の縁まで、たっぷりと塗り直された。そうして新しいアタッチメントにも、軟膏を塗り込んでいく。

一つは、さっきより明らかに毛が太かった。毛先がまばらで、硬そうだ。もう一つは、舌の形をしたものが一枚だけ。さっきは何枚も並んでいたのに、これは中央に一枚きりだった。

「っ……あ、……」

それぞれのアタッチメントをニップルドームにつけて、深瀬の胸にはめていく。スイッチが入れられ、空気を抜かれる。右の乳首に、荒い毛先が

触れる。毛が太いぶん、一本一本が独立して当たった。さっきは面で掃かれていたのに、今度は点でぽつぽつと引っ搔かれる。硬い毛先が通り過ぎるたび、痒みの芯を掠めては逸れていく。あと数ミリ沈めてくれたら。あと数ミリなのに、それが埋まらない。

「あ、あ、あ、っ、もうちょっと、もうちょっとおくう……っ♡♡♡」

「奥？ どこ？」

「わかんない、っ、わかんないけど、とどかなくて……………もどかし……♡♡♡」

「そっかあ、残念だね」

「ひぐっ♡♡♡……っ♡♡♡」

左のニップルドームについているアタッチメントも、ほしい刺激を運んでこない。一度乳首をさすって離れて、戻ってくるまでに空白がある。空白のあいだに、猛烈な痒みが戻ってくる。

「や、やだ、こっち、も、なんで……!!」

「さっきより辛そうだね」

「まって、っ、まってるあいだ、かゆいの……っ♡♡♡かゆいのやだ……！♡♡」

「さっきのほうが楽だったかもね？」